

# 奨学生レポート

2016年1月

スタンフォード大学電子工学科 Ph.D 課程

佐藤徳之



このレポートは留学後7回目となります。私自身の生活は研究ばかりであり変化がありません。そこで今回は妻を犠牲にして乗り切りたいと思います。

私の留学開始から約一年後の2013年夏に結婚し、妻に渡米してもらいました。銀行勤めであった妻は英語のバックグラウンドが一切なく不安も多くあったようですが、アメリカの良いところばかりを伝えなんとか説き伏せることに成功しました。妻の渡米にあたって大きな課題は二つあり、二人分の生活費と妻の英語力でした。生活費については、船井財団から多大な支援をいただいています。Stanford大学のあるPalo Altoにおける1 bed room apartmentの平均家賃が約\$2,500/月(このレポートを書いている時点のレートで30万円)ということもあり、非常に厳しいことを覚悟していました。運良くキャンパスの大学院生向けアパートに住めているので実際の家賃は\$1,400/月ほどですが、それでも赤字は免れない状態でした。当面は私の大学時代のアルバイトによる貯金と、妻の銀行時代の貯金を切り崩しながら赤字を補うとして、二人の貯金が尽きる前に新しい財源が必要でした。そこで、妻が渡米から二年以内にアメリカで就職することを目標としました。研究者等の専門職であったりバイリンガルであったりすればこの目標は容易かもしれませんが、文系学部卒の銀行勤務でTOEICスコアが大学生平均程度であった妻には大きな困難であったと思います。以下に妻の米国での就職までを2つのパートに分けて書きたいと思います: 1. ビザの選択について 2. インターンシップと就職について。このレポートが私のようにどうしても日本から配偶者を呼び寄せたいPh.D.学生の参考になれば幸いです。

## ビザの選択について

詳しくは米国大学院学生会ニュースレターの2013年3月号を参照していただきたいのですが、学生ビザとして一般的なF1ビザではなくJ1ビザを選択することによって、配偶者は労働許可証を得ることができます。J1ビザの不利な点としてよく知られた二年帰国ルールは国から支援を受けていない私には適用されないため問題ではなく、どちらのビザも卒業後の米国における就労を許可している点において等しく、当初はJ1ビザの取得を考えていました。しかしながらよく比較してみると、卒業後の就労条件について一点の違いがあります。卒業の時点においてF1ビザの場合には仕事が決まっている必要が無いのに対して、J1ビザの場合にはjob offerを得ている必要があります。

ます。日本の就職活動をベースに考えると問題はないように思えます。それは日本では卒業より半年～一年前に就職先が決まっていることが多いからです。しかしながら米国大学院の場合、少なくとも私の知る限りでは卒業の時点で仕事が決まっていることは多くありません。良いポジションを狙おうとするほどその傾向が強まります。なぜなら良いポジションには良いジョブトークが要求され、トークの質はデータ・発表技術の両面においてディフェンス(学位論文審査会)に向けて良くなるためです。特に、私は米国における企業の研究所を志望しており、高いレベルのジョブトークが求められることが分かっていたため、卒業後に余裕をもって就職活動できる時間が必要だと感じました。自分の能力が高ければそのような時間はいらないのですが、私はあまり効率良く物事を進められる人間ではないので結局 F1 ビザを選択しました。結果、妻には自分自身の手で労働許可を得てもらうことになりました。

この時点で現実的な選択肢として残されたのは、妻自身が F1 ビザを取得し大学に通い、インターンシップを経て卒業後に **Optional Practical Training (OPT)** を使って働き、最終的に **H1B** ビザ取得を目指すことです（参考までに: **Ph.D.** や米国公認会計士などの専門的な資格保持者であればインターンや **OPT** 等を経ずに **H1B** ビザを出してくれる会社があるかもしれません）。**H1B** ビザを会社に出してもらうために **OPT** という試用期間でアピールする必要がある、**OPT** に採用してもらうためにインターンシップでアピールする必要がある、インターンシップするためには **F1** ビザで大学に通う必要がありました。大学は **University of California, Santa Cruz (UCSC)** の **Extension program for accounting** を選択しました。ここを選んだ理由は **A4** で 3 ページ分ほどあるのですが、至極簡単に言うと 9 ヶ月という短い期間で 1 年の **OPT** を得られるためです。

### インターンシップと就職について

入学後しばらくは米国特有の大量の課題にかなり苦勞していたようです。私自身も渡米後はじめてのクォーターは授業が厳しすぎて全く研究出来なかったのを覚えています。その中で、インターンシップ先を見つけるために **Curriculum Vitae** や **Cover Letter** を作成し、絨毯爆撃のように多くの会社に応募しました。米国での就労経験のない外国人学生に返信する会社はほとんどゼロに近く、インタビューに辿り着くことすら至難の業でした。そんな中、はじめてインターンシップのオファーをくれた会社は日系の企業で、妻から知らせを受けて非常に嬉しかったことを覚えています。その企業からはインターンシップだけでなく **OPT** も含めた理想的なオファーを受けました。唯一の懸念はその企業は米国にあるにも関わらず社内で常に日本語が使われており、英語力の向上が期待できないことでした。登録の期限ぎりぎりまで応募を続けた結果、もう一社からインターンシップのオファーを貰うことができました。インタビューを担当したアカウント部門のマネジャーが元々移民であったため、米国で就労経験の無い外国人学生が仕事を探す大変さを理解し、**OPT** 無しのインターンシップのみという条件でオファーを出してくれました。二通のオファーは対称的で、一方はインターンシップ + **OPT** (社内語日本語)、もう一方はインターンシ

ップのみ（社内語英語）でした。非常に迷った結果、後者の会社を選び、上記のマネジャーがいるアカウント部門で半年間インターンシップを行いました。授業と並行しインターンシップをするのは体力的にも厳しそうでした。また、米国の企業らしく成果主義であり首を切られる社員も多くいるため緊張した状態で勤務していたようです。約4カ月が過ぎた頃、当初の条件から一転し、OPT のオファーを受けました。インターンシップのオファーは正直なところ同情であったと思いますが、OPT のオファーに関しては能力が認められた結果に間違いなく、良く頑張ったなと思います。2016年一月現在、妻は上記の会社で勤務しているのですが、毎日英語で仕事をしているせいか、私よりも英語が流暢になってしまいました。それが最近の悩みです。

最後に、そもそも大変な思いをしてまで配偶者を渡米させる必要がなかったのではないかと思います。修行中の身である Ph.D.学生に結婚は早いというのが日本では一般的かもしれません。ですが、私自身の場合は結婚後の方が圧倒的に研究結果も出るようになり健康を保てるようにもなりました。何より大きな難関を二人で乗り越えたことで、今後大きな困難があっても同じように頑張れる気がします。もし同じような状況で迷っている人がいれば、アドバイス出来るかもしれないので気軽に連絡してください。



サンクスギビングディナー。友人宅にてターキーを楽しみました。



タホ湖に旅行中、クリスマスクッキーを作りました。